各務原市における介護予防対策のための一考察

第3報　ボランタリーハウスの活動の現状と課題

鷲見　孝子・佐藤八千子・本間　恵美
石原加代子・木俣　光江

はじめに

各務原市の人口は平成 15 年4月1日現在136,861人で、高齢化率は15.7％であるが、平成19年には高齢化率が19.0％に達し、特に後期高齢者の増加が見込まれるなど、今後ますます高齢化が進展すると予測されることから、介護予防対策には力が注がれている。21世紀においてすべての高齢者が住みなれた地域の中で安心して暮らすことができる社会の実現のため、高齢者保健福祉計画及び介護保健事業計画「かがみはら高齢者総合プラン」などの策定により、高齢者施策が総合的・計画的にすすめられている[1]。この「かがみはら高齢者総合プラン」では5つの基本方針として、“誰でもが健康であるまちづくり”“誰でもいきいきと参加し生きがいを高めるまちづくり”“介護が必要になっても安心して暮らせるまちづくり”“緑豊かな人にやさしいまちづくり”“地域で支え合い、高齢者が敬愛されるまちづくり”が掲げられている。特に“地域で支え合い、高齢者が敬愛されるまちづくり”の中では、市民による福祉活動の活性化と福祉の風土づくりが目標にされており、その実現にむけてボランタリーハウスや近隣ケアグループなどの活動がなされている。ボランタリーハウス（以下ハウスという）の活動は週1回以上の定期的な活動で、閉じこもりがちや一人暮らし・病弱などの高齢者のために、食事の提供、相談、軽スポーツ、趣味活動など、交流と生きがいづくりの場として地域ボランティアにより運営されており、市が社会福祉協議会を通じて支援しているものである。

昨年実施した、各務原市高齢者の実態調査[2]において、単独世帯では食事をはじめとする健康維持に関する生活環境に問題があることが明らかにされた。また独居高齢者には精神的にも家族以外の支援が求められることから、ハウスの存在は高齢者の社会参加の手段として大きな位置をしめ、健康維持や介護予防におおいに役立っていることもうかがえた。しかしながらこの事業が発足した平成12年に3ヵ所、翌年に1ヵ所が立ち上がったのみで、その後新たな開設の様子はみうけられない。各地域でハウスが次々に立ち上げられ、活動が継続されることが望まれるため、現在の問題点を明らかにし基盤整備をすることを本研究の課題として、ハウスの現状を調査したので報告する。

研究方法

1．調査対象

ハウスの代表者 4人、ボランティア 118人、利用者 99人

2．調査時期　2003年7月

3．調査方法

代表者およびボランティアには質問用紙を配布し留め置き法で行い、利用者にはハウスにて交流しながら聞き取り調査を行い、単純集計した。

4．調査内容

(1) ハウスの代表者：　活動開始の動機・運営方法・運営上の苦労・代表者としての仕事で生きがいを感ずる時・特に力を入れていること・行政の対応について・昼食について・活動内容と今後の抱負

(2) ボランティア：　活動のきっかけ・活動のやりがいと自己の変化・活動の内容・企画運営について・活動上の困難や不満・将来の利用の有無

(3) 利用者：　利用のきっかけ・利用してよかったと思うこと・内容の満足度・レクリ

エーションについて・食事について・利用料について・勧誘について

調査結果

1．ボランタリーハウスの概況

ハウスは４ヶ所あり、その概況は表1の通りである。それぞれのハウスについての特徴および代表者の意向は次の通りである。

1）Aハウス

平成11年からデイサロンを有志で結成して活動していたところ、市の高齢者福祉総合計画の一環としてハウスを立ち上げることになったので、その第1号として平成12年8月にスタートした。デイサロン結成時から活躍していた人が、ハウスに移行後も２年ずつ代表を務め、現在は２代目である。利用者だけでなくボランティアにとっても、ここでの活

表1　ボランタリーハウスの概況

名　称	Aハウス	Bハウス	Cハウス	Dハウス
場　所	福祉センター	ふれあいセンター	ふれあいセンター	ふれあい会館
開設時期	平成12年８月	平成12年10月	平成12年10月	平成13年９月
運営主体	地域ボランティア	自治会	近隣ボランティア	地域ボランティア
活動日	毎週水曜（月４回）	毎週金曜（月４回）	毎週木曜（月４回）	毎週木曜（月４回）
ボランティア登録人数 １日当たり アンケート回答者	４０人 １５人 ２５人	４６人 １２人 ３６人	８１人 １４人 ２０人	５８人 ８～１２人 ３７人
利用者数 アンケート回答者	４０人 ２１人	２０人 １８人	３５～３６人 ３６人	２０～２５人 ２４人
活動内容	• 子育て支援グループと高齢者の交流 • ギター演奏と一緒に歌う • 舞踊観賞 • コーラス • 民謡と踊り • ゲーム • 落語観賞 • 大正琴観賞 • 大正琴を学ぶ • ３Ｂ体操 • 健康体操 • 健康診断と話 • アロマセラピー • 手品 • お琴と抹茶 • ダンス • 読み聞かせ • 手作り創作	月間基本行事（午前） １週　ギター演奏 ２週　カラオケ教室 ３週　ビデオ・映画 ４週　健康体操 年間行事 ７月　七夕まつり 12月　クリスマス • 小学５年生との交流（３回） • ちびっこクラブとの交流（２回） その他の行事 • はまなす会（踊り） • 手品、ゲーム • ハーモニカ演奏 • 交通安全と事故防止講習会 • 救急救命講習会 • 転倒骨折予防講習会 • 「オレオレ詐欺」予防講習会 • フィットセラピー • そば打ち実演	年間行事 ８月　七夕かざり 12月の最終日 花モチ作り その他の行事 • 民謡踊り • 手品 • フォークダンス • 簡単な手芸 • 健康体操 • 大正琴の演奏 • ギター演奏で懐メロを歌う • カラオケ大会	血圧・脈拍測定 （毎回実施） 年間行事 • 初釜 • おひなさま祭り • 花見会 • 七夕 • 年忘れ会 その他の行事 • 詩吟 • 民謡 • 日本舞踊 • お化粧教室 • 寄席（演芸会） • 法話 • フォークダンス • 軽体操 • 手工芸（作品作り）

動が友達作りの場所になるよう心がけている。朝の活動はボランティア手作りのお菓子とお茶を頂くことから始まる。

ボランティアの登録者は、自主的あるいは誘われて始めた人が8割を占め、開設の経緯からボランティアは女性ばかりである。利用者も女性のみであるが今後は男性にも参加してもらい、男女半々くらいで活動していきたいとの意向である。

2）Bハウス

高齢社会の到来に備え、十数年前に自治会で福祉委員会を設置し、高齢者を対象に活動してきたところ、その活動と市が計画しているハウス設立の趣旨が同一であるので、自治会として導入した。自治会の総会で代表者を推薦し、役員任期3年という規約により活動している。

特に力を入れていることは、高齢者の健康維持・増進と生きがい作りの支援である。活動内容については基本計画を役員会にて立案し、リーダー会に図って決定している。月間基本行事4種を決めており、午前中は毎月計画された内容で活動している。また昼食の献立も5品目の基本料理を定めておき、同じメニューが重ならないよう相談して決めている。献立は写真撮影したものをファイルし、保存している。

活動支援金の継続支給を行政に望んでいるが、今後益々高齢化が進むなか、支援金がなくても実施できるＮＰＯ法人の検討が必要かと考えている。

3）Cハウス

近隣ボランティアが主体となって活動している。企画作りに苦労はあるが、利用者の「ありがとう」・「いつもすみませんね」・「楽しみにしています」の声に生きがいを感じている。ボランティアの登録数は81人と他のハウスに比べ多いが、1回当たりのボランティアの人数は他と同様十数名である。

特に力を入れていることは「食事」であるが、現在の調理場は狭く、2～3人も入れば身動きが出来ないので、なんとか改造して欲しいと望んでいる。

4）Dハウス

開設にあたっては、数回にわたって会合し検討した後、校区の諸団体の協力・支援とボランティアの確保ができたので、前記3ハウスより1年遅れて開設した。開設当初の活動場所は集会場であったが、現在はふれあい会館に活動の場が移されている。

特に力を入れていることは「自主性・融和」で、利用者を主とした活動、誰とでも話ができる活動をと心がけている。事故防止にも気をつけ、会場まで坂道が多いため、利用者を車で送迎している。また、血圧・脈拍測定を毎回実施し、健康管理の一役を担っている。他のハウスではボランティアが食事を作っているが、ここでは弁当と給食を2回ずつ利用している。配食の利用により、ボランティアが食事作りに費やされない分、利用者とふれあう時間が確保でき、より融和が図られている。

2．ボランタリーハウスの食事について

1）昼食の形態

3つのハウスはボランティアが調理を行い、1つのハウスは弁当または給食の形で業者に委託して食事を提供していた。

昼食の献立については3つのハウスのうちAでは食生活改善普及員のメンバー数人により考えられていた。B は基本メニューが決まっており、班ごとに順番が回ってくる中で重ならないように考えられていた。C は元八百屋さんと調理師の資格を持った2名により考えられていた。D は食事を委託しているので、弁当2回、給食2回であった。ハウスによってそれぞれよりよい方法をとられているとは思うが、より負担感を減らす為にも利用者の反応を見ながらサイクルメニューにすると良いのではないかと思われる。

2）昼食内容の考慮

利用者の嗜好を考慮しているかについてはAのみ考慮しているとした。A は一汁三菜の献立を基本とし、季節の食材や行事食を取り入れるなど、食事に大変力を入れていることがうかがえた。B と C においては利用者の

意見を特に取り入れているわけではないが、高齢者に喜ばれそうな調理形態やメニューを各ハウスごとで工夫しているようである。Dは委託しているため、具体的な献立内容についての注文はしていないが、給食では汁物とおかず2品程度、弁当の場合はインスタントの汁物を付けていた。

3）食事提供における施設の不備や苦慮している点

食事提供は必須条件だが、開設の条件として調理施設の有無は問われないので、十分に調理施設が整っていない場合が多く不具合が生じている。

ハウスごとの施設については、Aでは調理施設が併設されていないため、別の離れた場所で作って運んでいる。これは運ぶ手間がかかるので、ボランティアにとっては不便さを感じている点であり、また衛生面や適温で提供するという点においてはリスクを伴うと思われる。

Cでは調理施設はあるが2ヶ所（1階と2階）に分かれており、3人がやっと動ける広さでとても狭いため、作る人にかなりのストレスを感じさせているようである。その上、利用者が多く食器の数もそろわないなど、利用者にとってもマイナスの面が見受けられる。Bは理想的な調理施設が整っており、施設に対しての不満はなかった。しかし食数管理という点で当日の利用者の数の把握についての難しさをあげていた。

4）食事作りに要する時間と食事時間

食事作りはだいたい10時から12時の2時間を要していた。調理担当人数は各ハウスとも、全体のボランティアの3分の1の人数が行っていた。食事作りを行っていないDは配膳するために30分ほどかかるのみで、食事を作らなくても良い分、利用者の話し相手などのボランティアの配置が可能である。食事時間はAとDが45分位、BとCが30分位であった。食事の時間は食事を提供するだけでなく、ボランティアと利用者の交流の場として活用することが望まれる。

5）衛生知識について

食事はおいしくなければならないが、同様に安全な料理を提供することが大切である。特に対象が高齢者であるため十分な配慮が必要と思われる。

各ハウスでの衛生の知識を得る機会については、調理を行っている3ハウスはいずれも何らかの形で知識を得ているようであるが、行政からの指導や助言は1ハウスを除いて、受けていないとのことであった。ハウスでの食事提供は必須条件である以上、調理施設の点検や見回り、調理に従事する人への衛生管理の徹底が必要ではないかと思われる。なにか事故が起きた場合の責任の所在はどこにあるのかを考えると、衛生に関する知識を得られる機会を行政も積極的に提供する必要がある[(3)]。

3．ボランティアの状況

1）ボランティアの参加者状況

ハウスでボランティアをしている人の性別は女性が83.1％、男性が6.8％、無回答10.1％で女性の方が圧倒的に多かった。（表2）

参加者の年齢は37～78歳と幅が広く、年代別では50代と60代で80％をしめ、70代が6.8％で30、40代は若干であった。

表2　ボランタリーハウス別のボランティアの状況

（％）

ボランタリーハウス名		全体	Aハウス	Bハウス	Cハウス	Dハウス
人数（人）		n＝118	n＝25	n＝36	n＝20	n＝37
年齢（％）	30代	1.7	0.0	2.8	5.0	0.0
	40代	3.4	0.0	8.3	5.0	0.0
	50代	41.5	52.0	52.8	30.0	29.7
	60代	35.6	32.0	25.0	40.0	45.9
	70代	6.8	0.0	11.1	5.0	8.1
	無回答	11.0	16.0	0.0	15.0	16.2
性別（％）	男	6.8	0.0	11.1	0.0	10.8
	女	83.1	84.0	86.1	90.0	75.7
	無回答	10.1	16.0	2.8	10.0	13.5
活動年数（％）	1年未満	10.2	8.0	22.2	5.0	2.7
	1年以上	31.4	12.0	16.7	15.0	67.6
	2年以上	28.0	32.0	33.3	45.0	10.8
	3年以上	11.9	32.0	11.1	5.0	2.7
	4年以上	2.5	8.0	2.8	0.0	0.0
	7年以上	1.7	0.0	0.0	0.0	5.4
	8年以上	0.8	0.0	0.0	0.0	2.7
	10年以上	4.2	4.0	0.0	15.0	2.7
	20年以上	0.8	0.0	2.8	0.0	0.0
	無回答	8.5	4.0	11.1	15.0	5.4
活動のきっかけ（％）	自発的に参加	38.1	32.0	41.7	10.0	54.1
	誘われて	28.8	48.0	22.2	25.0	24.3
	地域の役員や当番	31.4	20.0	36.1	60.0	18.9
	無回答	1.7	0	0	5.0	2.7

ボランティアとしての活動年数については、1年以上2年未満の者が最も多く31.4%、2年以上3年未満28.0%、3年以上4年未満11.9%であった。ハウス間で開設の時期が異なるため、平均では2年ぐらいになると思われる。

1ヶ月に何回参加するかについて、毎回参加する人で最高4回になり、1ヶ月に1回が52.5%、2回が19.5%、3回1.7%、4回6.8%であった。ボランティアという性格上、毎週となると抵抗があると思われるため、多くの人の参加を得るには、各自の負担を軽減するように毎週ではなく、1ヶ月に1～2回程度が適当と思われる。

2）ボランタリーハウスに参加したきっかけ

ハウスでボランティアをはじめるきっかけで最も多かったのは自発的に参加38.1%であり、次いで地域の役員や当番31.4%、誘われて28.8%であった。役員や当番の内訳は福祉委員、民生委員、町内の自治会役員、近隣ケアグループであった。

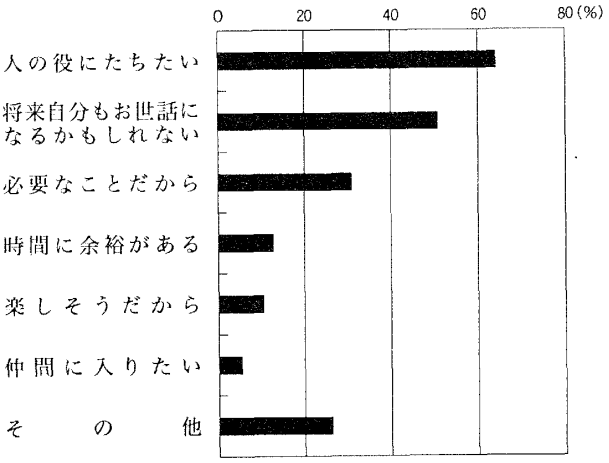

図1　活動をはじめる動機

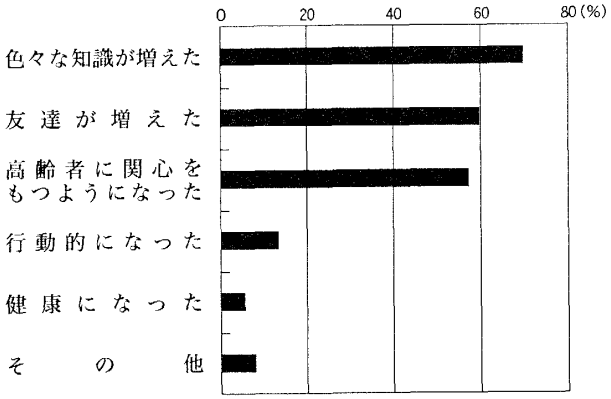

図2　活動して変わったこと

どんな理由でボランティアをはじめたかを図1に示す。多かったものに、人の役に立ちたい64.2%、将来自分もお世話になるかもしれないから50.6%であった。ハウスは居住地域での活動であることで将来、高齢者になった自分自身の問題として考えていることが大きな理由のひとつとなっているといえる。

3）ボランティア活動のやりがいについて

活動のやりがいについては87.3%の人が「やりがいがある」としていた。参加するきっかけが誘われてや当番や役員として参加している人もハウスでの活動はやりがいがあると感じていた。

どんな時にやりがいがあると感じるかを自由記述で調べた。多かったものに利用者が喜んでくれた、御礼を言われた等、行為に対しての利用者の反応と、ボランティア同士の活動の中で達成できた喜びが味わえたという2つの内容が多かった。

ハウスでの活動においてボランティア自身が変わったことについては図2に示す。色々な知識が増えたが69.5%と最も多く、友達が増えた59.3%、高齢者に関心をもつようになった56.8%が多かった。特に今まであまり気にとめなかった高齢者を身近に感じ関心をもてるようになったという点が、ハウスでの活動の特徴ではないかと思われる。また、「人の役に立つため」の活動が本人のためになっていることを自覚できたことも、活動継続の大きな力となっているといえる。

4）ハウスでの役割と活動で感じる負担

どんな役割を担当しているかでは掃除46.6%、調理44.9%、受付28.8%が多く、司会進行7.6%、企画は6.8%と少なく、その他が39.8%もあった。ハウスでの仕事は高齢者の受け入れ、食事をだす、レクリエーションをするが主であるため、掃除や調理をする人の割合は多いが、仕事を円滑に運ぶためにはその他として接待、食事の準備やかたづけなど様々な役割が必要となる。

自分に与えられた役割については、79.7

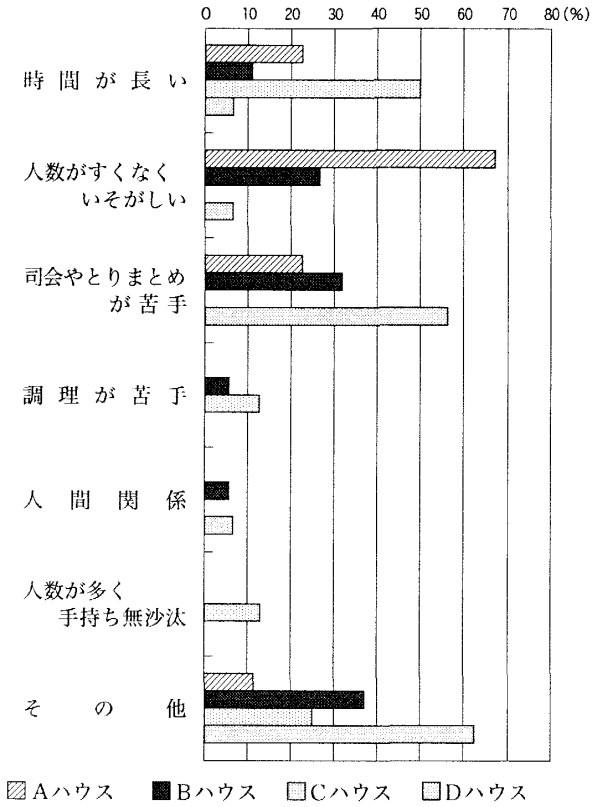

図3　負担や困ったこと

%の人がこれでよいと思っており、役割についての不満はあまりないと思われる。

ハウスでの活動で困ったことや負担に思うことがある人は44.1%、ない人が50.8%であった。負担を感じる人の理由としては、司会やとりまとめが苦手32.7%、人数が少なくて忙しい23.1%、ボランティアの時間が長い17.3%などであった。最も多かった司会やとりまとめは、責任が大きく、人により得手不得手があり、また何日か前より準備をしなければならないので負担と感じる人が多いと思われる。ハウスはすべてボランティアの創意工夫により行われているため、自由さがある分負担感もともなうと思われる。図3に各ハウスごとの負担に思うことの割合を示した。

5）企画・運営内容

① 企画・運営方法

ハウスでの企画や運営は、利用者やボランティアの意向を反映しているかについては、反映されているが57.6%、反映されていないは8.5%と若干で無回答が33.9%であった。反映されていると思う理由について自由記述では、利用者を見て満足しているようだから、ボランティアの意見を聞いてくれる、定期的に反省会などの話し合いがもたれているからという内容であった。

企画内容については、よいが62.7%、改善が必要16.9%、無回答20.3%であった。約60%の人は内容についてよいと感じているが、改善が必要とした人の理由は、「現在利用者は受け手という立場で与えられた内容を楽しんでいるが、利用者も意見をだして一緒に内容を考える」、「もっと考えればさらによい案がでてくるのでは」と模索しているような前向きな意見もあった。

② ボランティアからみた利用者の人数

各ハウスの利用者数は約20～30名となっており、これに対してちょうど良いが84.7%、少ない11.0%、多い1.7%、無回答2.5%で、ほとんどのボランティアは現状の人数が適当と感じている。ただし、利用者が30人を超えたハウスでは、多いとした人があり、施設の規模、ボランティア数が現状のままで利用者が増えると、対応できない状況になる可能性も考えられる。

6）将来ボランタリーハウスを利用したいか

利用しようと思う83.9%、思わないが5.9%であった。利用しようと思う人の理由は、活動内容がよい、社会とのかかわりをもっていたい、でかける場所があることで閉じこもりを防ぎたいなどであった。ハウスを利用したいと思わない人の理由は家庭の事情、将来のハウスの状況によるといった内容であった。

4．利用者の状況

1）利用者の概況

利用者の性別は男性15.2%、女性84.8%であった。利用期間は、それぞれのハウスが開始された時期やハウスの存在を知った時期が違うことから人によって差があるが、最も短い人で3ヶ月、最も長い人で3年6ヶ月であった。また、年齢層は60代から90代と幅

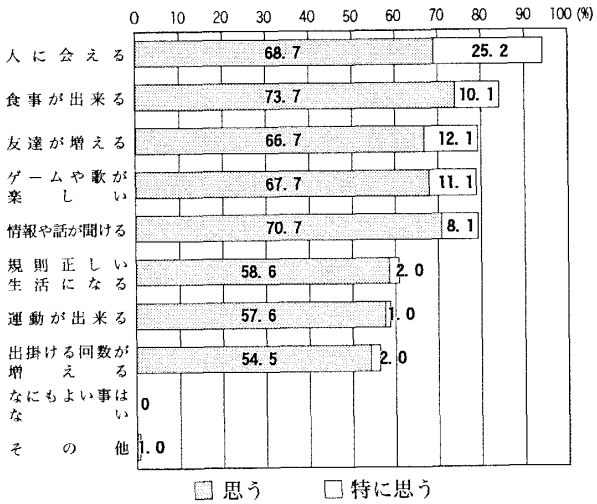

図4　ボランタリーハウスに来て良かったと思うこと

広く、70～80代が約90％を占めている。利用者の世帯構造は、同居世帯が68％、単独世帯26％と高齢者世帯6％で全体の3分の1が高齢者のみの家族構成であった。

2）利用のきっかけ

自主的に利用を始めた人が40％を占め、次いで友人の誘いが26％であった。また、世帯構造別でみると、単独世帯と高齢者世帯の利用者の90％以上が第三者の誘いによるものであった。前報にもあるように、これらの世帯は自主的に情報を集めにくく、民生委員などの第三者によるものが大きいためと思われる[2]。

3）利用して良かったと思うこと

利用して良かった事として、人に会える93.9％、食事が出来る83.8％など多くの利用者が複数の項目をあげていたが、なにもよい事はないという回答は皆無であった。また、その中でも特にこれが一番良かった事として人に会える25.2％、友達が増える12.1％などがあがっていた（図4）。

ハウスに参加するのは楽しいかでは、全体の99％の人が楽しみにしていた。特に「何を食べさせてもらえるかいつも楽しみにしている」「ここへ来たら黒板に書いてある今日のメニューをいつも見る」と食事を楽しみにしている様子がうかがえた。また、単独世帯や高齢者世帯の利用者の80％以上が人に会えるのが良かった事としていた。孤食などにより食欲低下に陥りやすいこのような利用者にとって、ハウスで大勢と触れ合うことで食欲を感じることができるといえる[4]。

4）レクリエーションについて

レクリエーション（以下レクと省略）は、午前・午後と1日に2回行われている。今後やってみたいレクの希望として、歌42％、作品作り35％が多く、俳句・習字・絵を描くは、全て10％以下と少数であった。作品作りの人気が高かった理由の一つに、「ハウスで作った作品を自宅に持ち帰ることで家族との会話のきっかけになる」とあった。また、「ボランティアの人ともっと会話をしたい」「利用者の中で何か得意なものがある人に教えてもらいたい」と全員で参加できるレクを希望している声もあった。

ハウスの利用を始めた頃と現在のサービスの内容を比べてみて違いを感じるかでは、はい（違う）27％、いいえ（違いはない）46％、分からない20％、無回答7％であった。ほとんどがサービスに違いはないと答えていたが、違うとした人の多くは「だんだん充実してきた」など前より現在のほうが良いと感じていた。

5）食事について

食事の内容・量・盛り付け・味付け、いずれも90％以上が満足していた。これは、ほとんどのハウスが一汁三菜であり、切り方・調理方法・味付けなどが高齢者の嗜好に合わせてあることの賜物だといえる。また、「食事はいつもとってもおいしい」「味もいいしきれいに作ってある」と利用者が非常に満足している様子がうかがえた。

ハウスの食事で一番おいしかったものとして、1位ちらし寿司、2位カレーライス、3位うなぎ丼とご飯物が上位を占めた。逆においしくなかったものとして、硬いものや薄味のものなどがあがった。

家庭とハウスの昼食を比較してみたところ、ハウスの方が充実している60％、特に差はない27％であった。前報で、家庭の昼食内容はあまり充実しているとはいえなかったことからも、ハウスの方が良いと感じていると思われる[2]。

ハウスの食事を食べることによって変化したことはあるかでは、利用していなかった時よりも食欲がわいた24％、体調が良くなった22％、また「これらの食事を参考にして家庭で食事を作っている」「自宅に帰り、妻に今日はこんなものを食べてきたと報告する」という利用者の声もあった。特に、単独世帯や高齢者世帯の利用者の半数近くは食欲がわいたと答えていた。このような世帯は食事の内容が単調な傾向だが [2]、ハウスの食事が変化のある食事につながっていると考えられる。

6）利用料について

ハウスの一回（一日）の利用料は一律300円であるが、利用者はこれをちょうど良い48％、安い49％とした。食事やレクのサービスが充実していることから満足感もあり、利用者の負担からみても適当だと考えられる。

7）利用者同士による勧誘について

利用者本人が、ハウスを利用したことのない高齢者を誘ってみたことがあるかでは、はい58％、いいえ37％、無回答5％であった(図5)。誘われた人の中で実際にハウスへ来た利用者は40％であり、誘われても来なかった残りの60％は「興味がない」「外に出かけるのがいや」など本人の参加意欲による理由と、「主人がうるさいので」「町内が違うから行けない」「家を空けられない」という本人は行く気持ちがあるにも関わらず行くことが出来ないなど環境による理由とがあった。このように個々に参加出来ない理由はあるが、これらはハウスの活動内容が正しく対象者に伝わっていないことと、ハウスの利用に様々な制約があるからだと思われる。

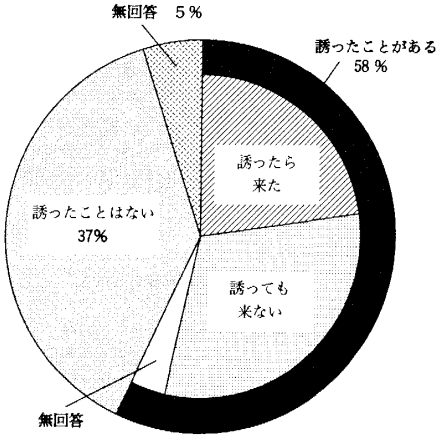

図5　勧誘の有無とその結果

8）利用継続について

ハウスをこれからも利用継続したいと答えた人は96％であった。しかし、利用回数を現在の一週間に一度という回数より増やしてほしいかでは、はいが22％で残りの80％近くは現状で満足していた。現在の利用回数が利用者にとってちょうど良い回数のように思われる。ハウスは利用者に高い支持を受け毎週の利用日がくるのを楽しみにしており、ハウスに参加することによって生活のリズムが整えられていると考えられる。

5. ボランタリーハウスの円滑な活動のために

- 参加しやすい条件作り……利用者の送迎の実施
- 地域密着型のハウス……小単位のハウスの開設
- ボランティアの負担の緩和……ボランティアの育成と確保
- 利用者の能力の活用……利用者参加型の活動

ハウスまで自分で行ける事を原則としているため、参加しやすいことが重要である。そのために利用者の送迎を行う、または送迎がされなくても参加しやすい小さい地域の公民館単位のハウスの必要性がある。Dハウスでは、地域全体に坂道が多く4～5階建てのアパート居住者もあり、状況を考慮して送迎を行い、参加しやすい条件作りをしている。万が一送迎時に事故が起きた場合の保障は社会福祉協議会加入の保険で行い、利用者、ボランティア共々安心した活動が出来る。

現在のハウスの内容を見ると自主性をいかし、創意工夫で運営を行っているのでボランティアにとってもやりがいがある反面、資金不足やボランティアの個人的負担が継続的にあることは否めない。調査では4割強のボランティアが、理由はさまざまであるが活動を負担に思っているという結果がでており、これ以上小さい単位のハウスの運営には行政の援助と利用者の能力の活用（後述）が必要である。

ボランティア参加者の年代構成は50～60歳代が大半で若年層がわずかの参加である。20～40歳代は年代的に子育てや仕事に追われ心身共にボランティアに目を向ける余裕がないものと思われるが、夏休み等に親子参加のような企画を組み、若年世代ことに男性に関心をもってもらい後継者作りが必要である。それに関してはAハウスは子育て支援グループとの交流、Bハウスは年間計画に小学生や子供会との交流が組まれ、Dハウスの所属する自治会では敬老の日に子供会との交流がもたれた。このような取り組みを盛んに行うことが、異なる年齢層との交流の場となり、次世代のボランティア育成にも重要である。

現在行われているボランティア主導型は、限られた会場スペースやボランティアの人数で行うにはスケジュールがスムーズに運び無難な運営方法である。しかし幾つかのコーナーを設け自分に合った内容の企画に参加できると楽しみややりがいが広がる。そのための方法として、利用者の多くがそれぞれの特技を発揮し、無理のない範囲で協力しあって利用者が受身でなく参加型にしていくことが望ましい。

まとめ

ボランタリーハウスの意義

高齢者にとってハウスの意義はさまざま考えられる。

第1は閉じこもり予防の観点である。閉じこもりをもたらす3つの要因として、身体的要因・心理的要因・環境要因があげられるが、この3つの要因が複雑に作用して悪循環に向かった場合、寝たきりや痴呆へと移行することもある[1]。そこで、ハウスの存在は良循環をもたらすと考える。利用者に誘われて実際に来た人は40％に達していることから、閉じこもりがちの人にとって、満足度の高い利用者からの誘いは、現実味があるのでまさに効果的といえる。特に一人暮らし・高齢者世帯の80％が人に会えるのを楽しみにしているとの結果から、まさに社会的・人的交流の場となっており、閉じこもり予防の一助という点で活動の意義は大きいといえる。

第2に容易な外出の機会になっている。高齢になってからの遠出は、体力面に限らず、交通手段の入手もなかなか困難である。コミュニティでの移動しやすい範囲のなかで、いつでも、だれでも気軽に参加できるという利点から、近くに活動の場があるということは非常に重要である。Dハウスでは道路事情から車で移動しているが、近距離であり高齢者の負担は少ないしドライブ気分にもつながり気分転換にもなっている。

第3にいきがいと生活の活性化につながっている点である。ハウスを今後も利用、継続したい高齢者は97％であったことからも、1週間に一度の参加を心待ちにしながら、生活のリズムに組み込み、楽しみといきがいにつなげていることが読み取れる。まさにサクセスフルエイジング・アクティブシニアという目標を達成できる可能性をもたらす。

第4に健康管理につながっている。Dハウスでは利用時の健康チェックを実施しているが、利用者とのコミュニケーション、食事の摂取状態、アクティビティの観察を通して健康状態はある程度把握できる。一方、外出する為には、日頃から自分で健康管理の意識が働くので副次的な効果もあらわれる。

第5に福祉教育や福祉観の確立の場になっている。そもそも、ボランティア活動は give and take の関係であるといえる。小中学生が世代を超え、さまざまな交流の機会を通して、心のコミュニケーションを図っていくことによる教育の効果は大きい。今後は、利用者自身も能動的に参加していける活動の場としての存在の意義も大きい。また、スタッフのアンケートから、ボランティア活動にやりがいと張り合いを感じていることも、まさに自分の身近なこととして、また将来のこととして高齢者観・福祉観を養う機会となっている。

各務原市への提言

「かがみはら高齢者総合プラン」の基本方針として、“地域で支え合い、高齢者が敬愛されるまちづくり”として、市民による福祉活動で

あるハウスの活動の更なる充実と発展が望まれる。しかし、当事者のみの活動には次のような限界があるだろう。

第１は運営資金の問題である。市からの支援金があるものの資金的には不足気味であり活動にも制限をきたすことになる。利用者の食事代はこれ以上の負担は無理とすれば、昼食代の一部負担という形での助成を考えていく必要もあるだろう。活動の場は、公共のセンターを利用しての活動であるが、調理室の狭さ、配膳の場所の悩みもある。食中毒に関してもたとえ1食と言ってもいざと言う時のリスクは計り知れないものがある。行政としても、ハード面のみでなく、衛生知識の普及と徹底に関しての啓蒙活動を行い、備えあれば憂いなしとしておく必要があるだろう。また、会場の問題として、利用者が多くなった場合制限しなくてはいけないところや、会場使用料も月４回となれば負担は大きいといえる。一方、アクティビティの更なる充実を考える時、やはり資金面で苦慮することになっていくだろう。

第２にソフト面である。毎週一回のハウスの活動となればそのかかわりは並大抵ではないと想像できることから、地域の実情に応じ、いろんなタイプのハウスがあってよいのではないかと考える。そもそも、ボランティア活動は、無理のない、負担感の少ない活動の展開が望まれることから、各務原市の福祉のまちづくりの担い手となる住民ボランティアの養成とボランティア教育の充実は必須である。

第３に住民パワーや民間活力とのパートナーシップによって、地域に根ざした活動がさらに発展し、福祉コミュニティを形成していくためには、行政は今まで以上に住民とのコミュニケーションをはかり、時には見守り、支援していきながら、その普及と充実のため広報活動をはじめあらゆる面からバックアップ体制を強化し、生活圏域でのハウスの存在に力をそそいでいただきたいものである。

最後に、社会福祉法に位置付けられた地域福祉計画において、“地域福祉に関する活動への住民の参加促進”に関する事項 (5) で起爆剤となるボランティアの確保と支援が計画に組みこまれることにより地域の福祉力の向上が期待できる。法第４条において地域福祉推進のための地域住民の責任が明確にされたが、誰もが何らかの形で活動に参加できるよう可能性を持つことである (6)。木原孝久は“住民を知り、理解し、寄り添い、後押しし、そしてちょっと先を行く…それが「まちづくり」の極意”[1] という。「2015 年の高齢者介護」(7) を見据えて、ハウスを"自己実現と共感できる主体形成の活動の場"として、また、地域福祉計画とともに老人保健福祉計画における介護予防・生活支援事業として、ハウスを重要な社会資源として位置付けることである。多様なマンパワーのかかわりからインフォーマルな相互扶助システムの集約の場としてハウスの活動がさらに発展することを願うものである。

— 食物栄養学科 —
— 人間福祉学科 —

参考文献

(1) 厚生労働省老健局計画課監修　介護予防に関するテキスト等調査研究委員会編
『介護予防研修テキスト』 社会保険研究所 2001年

(2) 本間恵美・佐藤八千子・鷲見孝子・荏原順子：各務原市における介護予防対策のための一考察
第１報　世帯構造別にみた高齢者の生活実態
東海女子短期大学紀要　第29号　2003年

(3) 栗木黛子:高齢社会の食事サービス　近代出版

(4) 社団法人　愛知県栄養士会監修：介護に役立つ食と栄養100講話集　2000年

(5) 地域福祉計画に関する調査研究委員会編『地域福祉計画の策定に向けて — 地域福祉計画に関する調査研究事業報告書 —』全国社会福祉協議会 2001年

(6) 野口定久編『新時代の地域福祉を学ぶ』
(株) みらい　2002年

(7) 高齢者介護研究会報告書『2015年の高齢者介護～高齢者の尊厳を支えるケアの確立に向けて～』
特定非営利法人全国コミュニティサポートセンター　2003年

引用文献

1）木原孝久「住民流福祉」がわかる月刊誌「天気予報」10月号 No262わかるふくしネットワーク p32